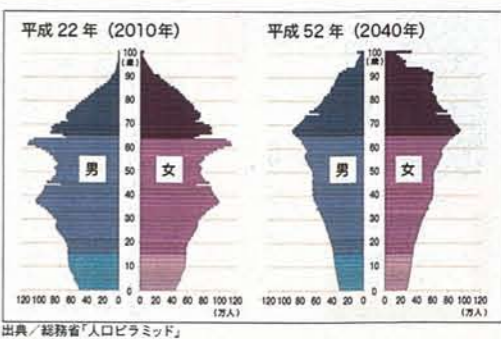


第11の危機 医療破綻

Q 09 定年までそろそろ折り返し地点。あなたがイメージする老後の生活は、次のどれ?
A 自然豊かな田舎に引っ込む
B 首都圏で都会的な生活を謳歌する
C 地方都市でほどほどに暮らす
D 場所はともかく一人身で悠々自適

「医療制度を利用する人の中心は老人。団塊ジュニア世代の加齢によって大量の高齢者が生まれると、医療の対応範囲を超えてしまうのだ。2040年には65歳以上が全人口の3割を超える。病院や医者は今でも足りないくらいです。当然、このままでは状況は悪化します。」(医療ジャーナリスト・伊藤隼也氏)



病院に搬送されるまでの時間も、東京が全国ワーストです。とはいえ、これに対して現場もまったく無策なわけではない。『より、回復の見込みのある患者に対して、限りあるリソースを振り分けようという議論は行われています。いずれは寿命をどのようか迎えるかという問題を踏まえて医療のパラダイムシフトが起きるでしょう。多くの高齢者は、病院で受け入れてもらえない、つまり病院で死ねない時代になるでしょうね。』



おくべきだろう。地域意識の希薄な土地で、家には自分ひとり... それこそ、最悪のシナリオだ。

ある日、自分が病で倒れる。家族が慌てて119番しても、救急車はすぐにはやってくる。小一時間たつてやっと救急隊が到着しても、今度は受け入れる病院がなく、さらに数時間のたらい回し。運よく回復するも、今度はリハビリを受ける施設がなく、寝たきり生活に...。近い将来、現実になるであろう、医療崩壊の場面だ。

高齢者が医療現場に及ぼす影響はすでに目に見えるレベルに。医療の最前線・救急医療が機能不全に陥り始めているのだ。『特にひどいのは東京。11年の東京消防庁の救急搬送人員は約63万8000人に上りますが、そのうち高齢者が占める割合は45・9%。しかも、この数字は年々増加しています(02年の高齢者率は34・4%)。これが現場を圧迫しており、

も...と警鐘を鳴らすのは、不動産コンサルタントの長嶋修氏。『今の日本では世帯数が減少していくことが明白であるにもかかわらず、住宅の数が減り続けている。諸外国では需給のバランスを維持するための「住宅総量目安」を設定しているのに、日本だけがまったくの無計画。このままでは人気の薄い郊外から空き家が増加していくのは目に見えています。更地にするにもカネがかかる

ので、多くは空き家のまま放置されたあげく、倒壊したり、犯罪の温床になったりして街を荒廃させている。現在、団塊世代が中心になって住んでいるような郊外のベッドタウン(しかも駅からバス移動)の一部は、いずれデトロイトみたいなスラム街になってもおかしくありません。また、地震対策にこだわって、耐震性に優れた新築を購入...という選択も実は損をする可能性がある。

伊藤隼也氏 医療ジャーナリスト 写真タレント 著者 伊藤隼也氏 ジャーナリスト・写真タレント。フジテレビ「とくダネ」監修。医療プロジェクトとしてレギュラーとして出演に当たっている。

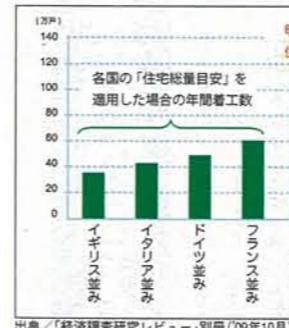
第12の危機 マンション崩壊

Q 10 住宅ローン金利が本格的に上がる前に、思い切ってマンション購入! あなたがもっともこだわりたいのはどこ?
A 耐震性に優れた新築
B ターミナル駅周辺の利便性
C 多少郊外でもいいので値段の安さ

「アベノミクスで不動産価格も上昇か?」と景気のいい予測も出回る昨今、金利も上がる前にマンション購入を、少ない元手で郊外の安い物件に手を出す人もいるかもしれないが、それは危険か

「地方都市では、駅周辺などの中心市街地に、生活に必要な施設を密集させる。コンパクトシティ政策を取っている都市が増えています。富山県富山市、青森県青森市などはその先行事例。人口が集中する地域なら、生活のインフラも維持されますが、少しでもそのエリアから外れてしまえば、生活が機能不全に陥る恐れも」

「近年は、耐震補強の技術が格段に向上しています。築年数が古く割安なマンションでも、上下水道などのインフラさえしっかりしていれば、最新技術を用いた簡単な耐震補強を行うことで、2世代、3世代と住み続けることが可能になるでしょう。マンションの建て替えなんて、実はほとんど必要ないんですよ。耐用年数が上がれば、都心部の好立地のマンションなどは、81年の新耐震基準の前に建て



出典「経済調査レビュー」別冊(09年10月)より長嶋修事務所作成



「近年は、耐震補強の技術が格段に向上しています。築年数が古く割安なマンションでも、上下水道などのインフラさえしっかりしていれば、最新技術を用いた簡単な耐震補強を行うことで、2世代、3世代と住み続けることが可能になるでしょう。マンションの建て替えなんて、実はほとんど必要ないんですよ。耐用年数が上がれば、都心部の好立地のマンションなどは、81年の新耐震基準の前に建て

「地方都市では、駅周辺などの中心市街地に、生活に必要な施設を密集させる。コンパクトシティ政策を取っている都市が増えています。富山県富山市、青森県青森市などはその先行事例。人口が集中する地域なら、生活のインフラも維持されますが、少しでもそのエリアから外れてしまえば、生活が機能不全に陥る恐れも」

「近年は、耐震補強の技術が格段に向上しています。築年数が古く割安なマンションでも、上下水道などのインフラさえしっかりしていれば、最新技術を用いた簡単な耐震補強を行うことで、2世代、3世代と住み続けることが可能になるでしょう。マンションの建て替えなんて、実はほとんど必要ないんですよ。耐用年数が上がれば、都心部の好立地のマンションなどは、81年の新耐震基準の前に建て

長嶋修氏 不動産コンサルタント 著者 長嶋修氏 99年に業界初の個人向け不動産コンサルティング会社「さくら事務所」を設立。国土交通省・経済産業省などの要員も歴任している。

平和ボケに活だ! 厳選ブックガイド

最悪の近未来——この言葉を「マヤ暦による人類滅亡の予言的な絵空事として捉える人は少なくないだろう。危機というものは、それとわかるほど至近距離に迫ってきてもおお、実害を被るまではなかなか気づくことのできない存在だ。よって、われわれが最悪の近未来から身を守るには、絶えずこう自問しなければならぬ。『自分、平和ボケ、しているのではないか?』と。

手として知られる吉田大助氏が、真つ先に挙げた作家は伊坂幸太郎。『伊坂幸太郎はエッセイ集で、自身が、心配性、であると公言しています。政治から経済から教育から、メディアが突きつけてくるさまざまな情報に本気で翻弄され、日々心が折れかけているそうです。彼の小説の主人公はたいがい心配性なので、魂の部分で作家と繋がっているのは間違いない(笑)。悪夢のような事態に巻き込まれてしまったとき、人はどんなふうにかんじ、行動するか、事態を突破するかのシミュレーションが、伊坂幸太郎の真髓だと思います。』

吉田大助氏選 『ガソリン生活』 伊坂幸太郎 朝日新聞出版 『土屋敦氏選』 『東海東南南海 巨大運動地震』 (倉嶋哲夫 集英社) 『吉田大助氏選』 『迷宮警視正 最後の秘境』 (倉嶋哲夫 徳間書店) 『何者』 (朝井リョウ 新潮社)

吉田大助氏選 『迷宮警視正 最後の秘境』 福島第一原発メルトダウン後の立ち入り禁止区域を舞台にした作品。戸川幸夫は、フュージョンと下流社会化が首長の手で徹底展開されたらどうなるかをシミュレーションした「バカをやつれ」も必読。

取材・文 江沢洋 小山田裕哉 田中麻衣子 古澤誠一郎 イラスト もりいすお 版権 コヤナギユウコ デザイン 西田周平

「アベノミクスで不動産価格も上昇か?」と景気のいい予測も出回る昨今、金利も上がる前にマンション購入を、少ない元手で郊外の安い物件に手を出す人もいるかもしれないが、それは危険か

「近年は、耐震補強の技術が格段に向上しています。築年数が古く割安なマンションでも、上下水道などのインフラさえしっかりしていれば、最新技術を用いた簡単な耐震補強を行うことで、2世代、3世代と住み続けることが可能になるでしょう。マンションの建て替えなんて、実はほとんど必要ないんですよ。耐用年数が上がれば、都心部の好立地のマンションなどは、81年の新耐震基準の前に建て

「地方都市では、駅周辺などの中心市街地に、生活に必要な施設を密集させる。コンパクトシティ政策を取っている都市が増えています。富山県富山市、青森県青森市などはその先行事例。人口が集中する地域なら、生活のインフラも維持されますが、少しでもそのエリアから外れてしまえば、生活が機能不全に陥る恐れも」

「近年は、耐震補強の技術が格段に向上しています。築年数が古く割安なマンションでも、上下水道などのインフラさえしっかりしていれば、最新技術を用いた簡単な耐震補強を行うことで、2世代、3世代と住み続けることが可能になるでしょう。マンションの建て替えなんて、実はほとんど必要ないんですよ。耐用年数が上がれば、都心部の好立地のマンションなどは、81年の新耐震基準の前に建て

取材・文 江沢洋 小山田裕哉 田中麻衣子 古澤誠一郎 イラスト もりいすお 版権 コヤナギユウコ デザイン 西田周平